

KUNST ARZT では、2年ぶり2度目となる  
岩坂佑史の個展を開催します。  
岩坂佑史は、「生きている」ことをスティックに  
視覚化してきたアーティストです。  
本展では、小休止をはさみながらも6年間継続している、  
アーティスト自身の尿を和紙に塗り重ねていく「message」  
シリーズに絞った展示構想です。  
衛生上の問題を不問にする、オリジナルの額に  
完全封印された“絵画”群は、ミニマルな静けさと  
狂気が表裏一体となり、独特の美を生み出しています。  
消毒を繰り返すことがデフォルトとなった昨今、  
『杉林で立ち小便したとき社会から逸脱し、  
自然と一体になったような感覚(\*)』  
が味わえる貴重な空間かもしれません。  
\* アーティストのメモより

(KUNST ARZT 岡本光博)



message  
2019-20  
和紙、尿  
912mm×730mm  
額サイズ:1066×884×50mm

#### 経歴

1994 滋賀県出身  
2019 京都精華大学洋画コース卒業  
在学時に二度の休学中に3ヶ月のスペイン滞在や  
実践的な農業研修を経験

#### 個展

2019 排すれば生ずる (ギャラリー風の門)  
2020 through me (KUNST ARZT)

#### グループ展

2020 ドローイング祭り (京都精華大学春秋館 / 京都)  
2019 “dwell” (室町シュトラッセ / 福岡)  
2018 in and out (京都精華大学7-23 ギャラリー / 京都)

2022年7月19日(火)から24日(日)

12:00から18:00

会場: KUNST ARZT

605-0033 京都市東山区夷町155-7 2F

## Schism

### アーティストによる展覧会について

Schism"とは分離、分派という意味の単語です。  
Toolというバンドの曲名に用いられており、曲からインスパイアされ展覧会のタイトルにしました。

### 2022/4 メモ

生きていて演じる様々な自分。己を押し殺し息を潜めて空間の一部になる時、むしろその不快感によって引き出される「私」が居る。  
自由で開放的だと感じる時、その一歩先に虚無を発見する「私」が居る。

何かを欲して泣きじゃくるくせに、手に入ると興味を失う子供のように、自身の一貫性を保てない。  
関係性を紐解き自己らしきものを俯瞰してみるのは断片的で引き裂かれた多数の他人のようだ。

それらを統合しようと腕き足掻く様が私の表現なのかもしれない。  
不協和をすり合わせ生じた歪み、はみ出た自我、不快感。それが本当の私。そう考えて安心してしまうことにさえ敗北感がある。

線を明確にしようとすればするほど曖昧に重なり合う境界。  
その渦中、自他がオーバーラップし美しさが垣間見えることがある。  
杉林で立ち小便したとき社会から逸脱し、自然と一体になったような感覚。  
風や匂いに立ち眩むあの心地良さを私は逃避のように求めているのだろう。



個展「through me」(2020) 展示風景より



### 須臾再顕

和紙に絵の具を撒き、できた飛沫を切り抜きます。絵の具が紙にぶつかり形を成すまでは僅かな間ですが、それらを長い時間をかけて手作業で行います。その結果、紙にとっては一度得た情報を失う空虚な作業ですが、イメージとしては二次的に顕れ人の手による時間の集積のみが可視化されます。

左は2019年、京都精華大での展示風景 5000×2000 mm

右は2020年、KUNST ARZTでの個展展示風景